

技術・家庭科7領域選択に関する 中学校教師の意識について

梅田 玉見*・川崎 貞満**・木庭雅保***

*岡山理科大学工学部

**西大寺中学校

***岡山理科大学附属高等学校

(平成4年9月30日受理)

1 はじめに

1993年度より全面的に実施される中学校の教育課程で、必修の技術・家庭科は、学校教育施行規則の第3章中学校の54条によってその授業時数の標準が、第1学年70時間、第2学年70時間、第3学年70～105時間3か年で計210～245時間と規定され、第54条の2の基準として告示された学習指導要領に従って学習指導を展開することになった。

また、指導内容は、学習指導要領によって、木材加工、電気、金属加工、機械、栽培、情報基礎、家庭生活、食物、被服、住居、保育の11領域で示し、指導計画の作成実施にあたっては、①学校においては、地域や学校の実態及び生徒の特性等に応じて11領域のうちから7領域以上を履修させ、②木材加工、電気、家庭生活、食物の4領域は、すべての生徒に履修させる。その4領域の中で、③木材加工、家庭生活の2領域は、第1学年において履修させることを標準としている。更に授業時数については、④木材加工、電気、家庭生活、食物の各領域はそれぞれ35時間、それ以外の領域はそれぞれ20～30時間ずつ当てることを標準とする。の4つの特徴をもって実践させようとしている。

少ない時間数の中で、充実した内容を、可能な限り男女生徒に等しく履修させるためには、どのような領域を選択し、どのような履修状態で学習を進めて行ったらこの教科の目的がより効果的に達せられるか。

11領域の中から7領域を選んで教育内容を編成する場合、その中核をなすものは、教えられる側即ち生徒側の望む領域意識と教える側即ち教師側の望む領域意識との結合結果である。それらの領域意識の結果を明らかにしようとして、それぞれの側を調査し、教えられる側の調査は1991年度に実施し、1991年3月の岡山理科大学紀要第27号Bにその結果を公表した。今回は教える側の教師を調査し、その結果を報告する。

2 意識実態調査実施について

1 調査対象

岡山県公立中学校技術・家庭科教師—男子教師149名，女子教師147名，合計296名（調査者，男子教師283名，女子教師265名，合計548名。有効回収率54%）

2 調査時期

1992年3月～4月

3 調査内容と調査方法

3.1 調査内容

調査内容は表1に示したアンケート形式によった。

3.2 調査方法

岡山県教育関係職員録編纂委員会1991年6月30日発行の岡山県教育関係職員録により岡山県公立の全中学校174校の技術・家庭科男子教師283名，女子教師265名，計548名を対象に，調査用紙を各学校宛に郵送，回収をし，調査目的に従って集計をした。

従って，集計は男子教師と女子教師とに分け，それぞれの教師が年齢別に，男子生徒に対して，女子生徒に対してどのような領域を7つ選んで領域構成をしようとしているかに主眼をおいて行なった。

3 調査結果とその考察

1 調査結果

次の表2～表4は，男子教師，女子教師別（年代別をも含めて）に，男子生徒，女子生

表1 技術・家庭科「領域選択」アンケート（1992.3）

男・女 20歳代 30歳代 40歳代 50歳代（※ 該当のところを○で囲んで下さい）
下のアンケート用紙に，先生が生徒に学習させたい領域を，指導要領の指定を考えずに7つ選び，該当欄に○をつけてください。

1. 男子生徒に対して

領域	該当欄
A 木材加工	
B 電気	
C 金属加工	
D 機械	
E 栽培	
F 情報基礎	
G 家庭生活	
H 食物	
I 被服	
J 住居	
K 保育	

2. 女子生徒に対して

領域	該当欄
A 木材加工	
B 電気	
C 金属加工	
D 機械	
E 栽培	
F 情報基礎	
G 家庭生活	
H 食物	
I 被服	
J 住居	
K 保育	

徒に対しての7領域を選択した人数とその％を、表5は、男子教師、女子教師の生徒に対する7領域の選択順位結果を示したもので、図1～図3は、男子教師、女子教師、男女教師合計別の7領域選択の状態を棒グラフによって表わしたものである。

2 調査結果の考察

以下男子教師の結果（表2、表5、図1）、女子教師の結果（表3、表5、図2）、男子教師・女子教師総合の結果に分けて分析、考察を進めて行く。

2.1 男子教師の7領域選択結果の考察（表2、表5、図1）

① 男子生徒に対して

11領域中7領域に選んでいるのは、各年齢代を通して、電気の97%をはじめ機械の93%、木材加工92%、食物91%、情報基礎87%、金属加工59%、家庭生活57%の領域であった。反対に7領域に選んでいない下位のものは、住居の24%をはじめ被服の29%、栽培34%、保育37%の4領域であった。従って、系列別に見ると技術系列から5領域、家庭系列から

表2 岡山県中学校技術・家庭科教員の7領域選択意識調査結果（その1）

教 員 生 徒	男										男女 合計
	男子生徒に対して					女子生徒に対して					
歳	20代	30代	40代	50代	計	20代	30代	40代	50代	計	
木材加工 (%)	40 78.4	64 98.5	23 100.0	10 100.0	137 91.9	32 62.7	47 72.3	17 73.9	8 80.0	104 69.8	241 80.9
電 気 (%)	49 96.1	62 95.4	23 100.0	10 100.0	144 96.6	47 92.2	58 89.2	22 95.7	9 90.0	136 91.3	280 94.0
金属加工 (%)	28 54.9	41 63.1	15 65.2	4 40.0	88 59.1	2 3.9	6 9.2	1 4.3	1 10.0	10 6.7	98 32.9
機 械 (%)	47 92.2	60 92.3	22 95.7	10 100.0	139 93.3	3 5.9	14 21.5	3 13.0	4 40.0	24 16.1	163 54.7
栽 培 (%)	17 33.3	21 32.3	8 34.8	4 40.0	50 33.6	14 27.5	15 23.1	10 43.5	3 30.0	42 28.2	92 30.9
情報基礎 (%)	48 94.1	53 81.5	20 87.0	8 80.0	129 86.6	43 84.3	50 76.9	14 60.9	5 50.0	112 75.2	241 80.9
家庭生活 (%)	33 64.7	31 47.7	15 65.2	6 60.0	85 57.0	41 80.4	47 72.3	17 73.9	9 90.0	114 76.5	199 66.8
食 物 (%)	46 90.2	61 93.8	22 95.7	7 70.0	136 91.3	51 100.0	65 100.0	22 95.7	10 100.0	148 99.3	284 95.3
被 服 (%)	14 27.5	23 35.4	3 13.0	3 30.0	43 28.9	48 94.1	60 92.3	21 91.3	9 90.0	138 92.6	181 60.7
住 居 (%)	12 23.5	13 20.0	6 26.1	4 40.0	35 23.5	31 60.8	33 50.8	13 56.5	5 50.0	82 55.0	117 39.3
保 育 (%)	19 37.3	28 43.1	6 26.1	2 20.0	55 36.9	51 100.0	59 90.8	20 87.0	7 70.0	137 91.9	192 64.4
教師数	51	65	23	10	149	51	65	23	10	149	298
合計教師数	149										

注：上段は人数、下段はその％

2 領域を選んでいることになる。

② 女子生徒に対して

11領域中7領域を選んでいるのは、各年齢代を通して、食物の99%をはじめ被服の93%、保育92%、電気91%、家庭生活77%、情報基礎75%、木材加工70%の領域であった。反対に7領域に選んでいない下位のものは、金属加工の7%をはじめ機械の16%、栽培28%、住居55%の4領域であった。従って、系列別に見ると技術系列から3領域、家庭系列から4領域を選んでいることになる。

③ 男子女子生徒総数に対して

11領域中7領域を選んでいるのは、各年齢代を通して、食物の95%をはじめ、電気の94%、木材加工、情報基礎81%、家庭生活67%、保育64%、被服61%の領域であった。反対に7領域に選んでいない下位のものは、栽培の31%をはじめ金属加工の33%、住居39%、機械55%の4領域であった。従って、男女生徒の総合では、系列別に見ると技術系列から

表3 岡山県中学校技術・家庭科教員の7領域選択意識調査結果(その2)

教 員 生 徒	女										男女 合計
	男子生徒に対して					女子生徒に対して					
歳	20代	30代	40代	50代	計	20代	30代	40代	50代	計	
木材加工 (%)	49 94.2	45 84.9	18 100.0	22 91.7	134 91.2	29 55.8	32 60.4	12 66.7	17 70.8	90 61.2	224 76.2
電 気 (%)	50 96.2	52 98.1	18 100.0	23 95.8	143 97.3	43 82.7	44 83.0	17 94.4	18 75.0	122 83.0	265 90.1
金属加工 (%)	22 42.3	21 39.6	9 50.0	10 41.7	62 42.2	1 1.9	2 3.8	0 0.0	0 0.0	3 2.0	65 22.1
機 械 (%)	40 76.9	44 83.0	12 66.7	15 62.5	111 75.5	12 23.1	8 15.1	0 0.0	2 8.3	22 15.0	133 45.2
栽 培 (%)	11 21.2	15 28.3	6 33.3	9 37.5	41 27.9	10 19.2	12 22.6	7 38.9	7 29.2	36 24.5	77 26.2
情報基礎 (%)	50 96.2	45 84.9	15 83.3	21 87.5	131 89.1	45 86.5	38 71.7	12 66.7	17 70.8	112 76.2	243 82.7
家庭生活 (%)	42 80.8	41 77.4	15 83.3	21 87.5	119 81.0	46 88.5	51 96.2	16 88.9	23 95.8	136 92.5	255 86.7
食 物 (%)	50 96.2	51 96.2	17 94.4	22 91.7	140 95.2	52 100.0	53 100.0	18 100.0	24 100.0	147 100.0	287 97.6
被 服 (%)	11 21.2	15 28.3	0 0.0	3 12.5	29 19.7	49 94.2	49 92.5	18 100.0	22 91.7	138 93.9	167 56.8
住 居 (%)	9 17.3	10 18.9	3 16.7	7 29.2	29 19.7	28 53.8	34 64.2	9 50.0	14 58.3	85 57.8	114 38.8
保 育 (%)	30 57.7	36 67.9	12 66.7	14 58.3	92 62.6	50 96.2	50 94.3	17 94.4	22 91.7	139 94.6	231 78.6
教師数	52	53	18	24	147	52	53	18	24	147	294
合計教師数											147

注：上段は人数，下段はその%

3領域、家庭系列から4領域を選んでおり、順位は違うけれども7領域は女子の生徒の場合と全く同じ傾向を示していた。

2.2 女子教師の7領域選択結果の考察（表3、表5、図2）

① 男子生徒に対して

11領域中7領域に選んでいるのは、各年齢代を通して、電気の97%をはじめ食物の95%、木材加工91%、情報基礎89%、家庭生活81%、機械76%、保育63%の領域であった。反対に7領域に選んでいない下位のものは、被服、住居の20%をはじめ栽培28%、金属加工42%の4領域であった。従って、系列別に見ると技術系列から4領域、家庭系列から4領域を選んでいることになる。

② 女子生徒に対して

11領域中7領域に選んでいるのは、各年齢代を通して、食物の100%をはじめ保育の95%、住居94%、家庭生活93%、電気83%、情報基礎76%、木材加工61%の領域であった。反対

表4 岡山県中学校技術・家庭科教員の7領域選択意識調査結果（その3）

教 員	男・女		
	生 徒		
	男子合計	女子合計	男女合計
木材加工 (%)	271 91.6	194 65.5	465 78.5
電 気 (%)	287 97.0	258 87.2	545 92.1
金属加工 (%)	150 50.7	13 4.4	163 27.5
機 械 (%)	250 84.5	46 15.5	296 50.0
栽 培 (%)	91 30.7	78 26.4	169 28.5
情報基礎 (%)	260 87.8	224 75.7	484 81.8
家庭生活 (%)	204 68.9	250 84.5	454 76.7
食 物 (%)	276 93.2	295 99.7	571 96.5
被 服 (%)	72 24.3	276 93.2	348 58.8
住 居 (%)	64 21.6	167 56.4	231 39.0
保 育 (%)	147 49.7	276 93.2	423 71.5
教師数	296	296	592
合計教師数		(296×2)	

注：上段は人数，下段はその%

表5 岡山県中学校技術・家庭科教員の7領域選択順位結果

教員	男 子			女 子			男 ・ 女		
	男	女	合計	男	女	合計	男	女	合計
木工	3	7	3	3	7	6	3	7	4
電気	1	4	2	1	5	2	1	4	2
金工	6	11	10	8	11	11	7	11	11
機械	2	10	8	6	10	8	5	10	8
栽培	9	9	11	9	9	10	9	9	10
情報	5	6	4	4	6	4	4	6	3
家生	7	5	5	5	4	3	6	5	5
食物	4	1	1	2	1	1	2	1	1
被服	10	2	7	10	3	7	11	2	7
住居	11	8	9	10	8	9	10	8	9
保育	8	3	6	7	2	5	5	8	6

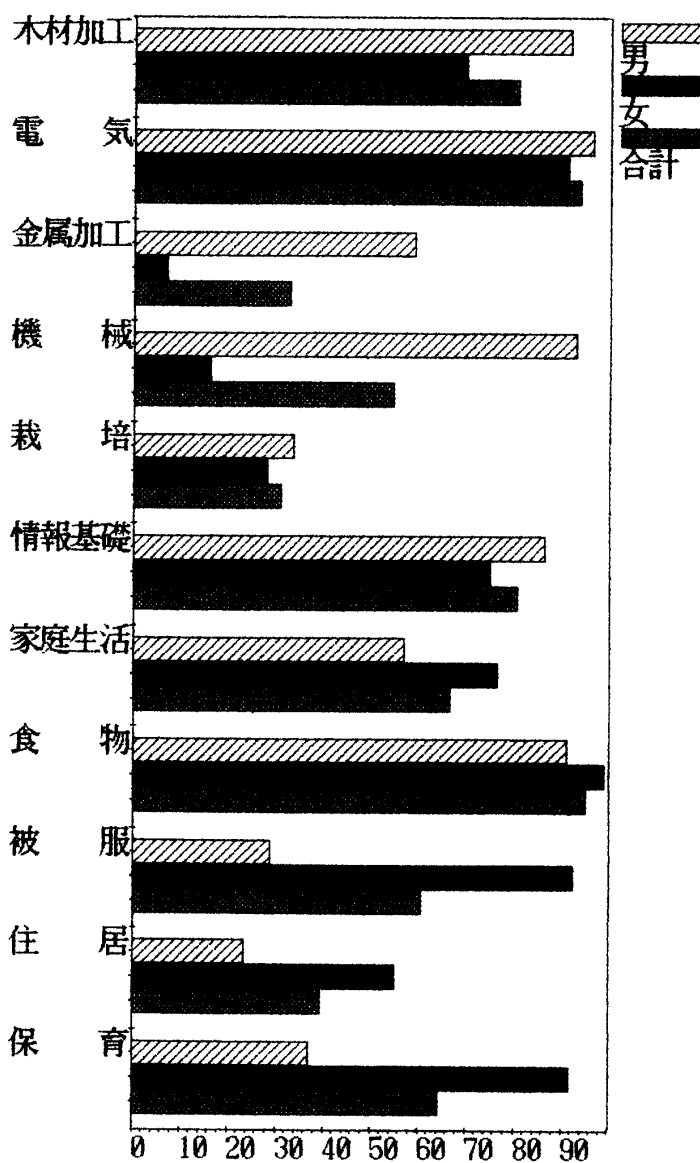


図1 男子教員の7領域選択グラフ

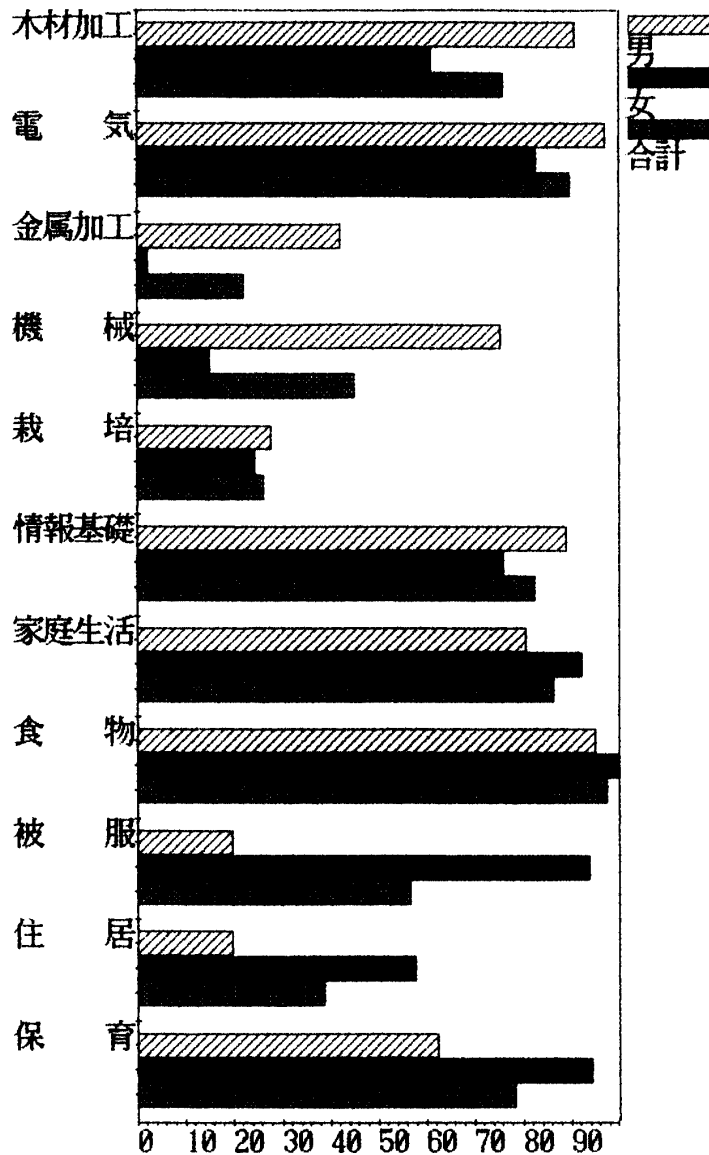


図2 女子教員の7領域選択グラフ

に7領域に選んでいない下位のものは、金属加工の2%をはじめ機械の22%、栽培25%、住居58%の4領域であった。従って、系列別に見ると技術系列から3領域、家庭系列から4領域を選んでいることになる。

③ 男子女子生徒総数に対して

11領域中7領域に選んでいるのは、各年齢代を通して、食物の98%をはじめ、電気90%、家庭生活87%、情報基礎83%、保育79%、木材加工76%、被服57%の領域であった。反対に7領域に選んでいない下位のものは、金属加工の22%をはじめ栽培26%、住居39%、機械45%の4領域であった。従って、男女生徒の総合では、系列別に見ると技術系列から3領域、家庭系列から4領域を選んでおり、選択の7領域名は、順位は若干異なるが女子の生徒の合計と全く同じ傾向を示していた。

2.3 男子教師女子教師を通しての7領域選択結果の考察(表4, 表5, 図3)

① 男子・女子教師の総計が男子生徒に対して

11領域中7領域を選んでいるのは、電気の97%をはじめ、食物の93%、木材加工92%、情報基礎88%、機械86%、家庭生活69%、金属加工51%の領域であった。反対に7領域に選んでいない下位のものは、住居の22%をはじめ被服31%、栽培35%、保育50%の4領域であった。従って、系列別に見ると技術系列から5領域、家庭系列から2領域を選んでいることになる。

② 男子・女子教師の総計が女子生徒に対して

11領域中7領域を選んでいるのは、食物の100%をはじめ被服、保育の93%、電気87%、家庭生活85%、情報基礎76%、木材加工66%の領域であった。反対に7領域に選んでいな

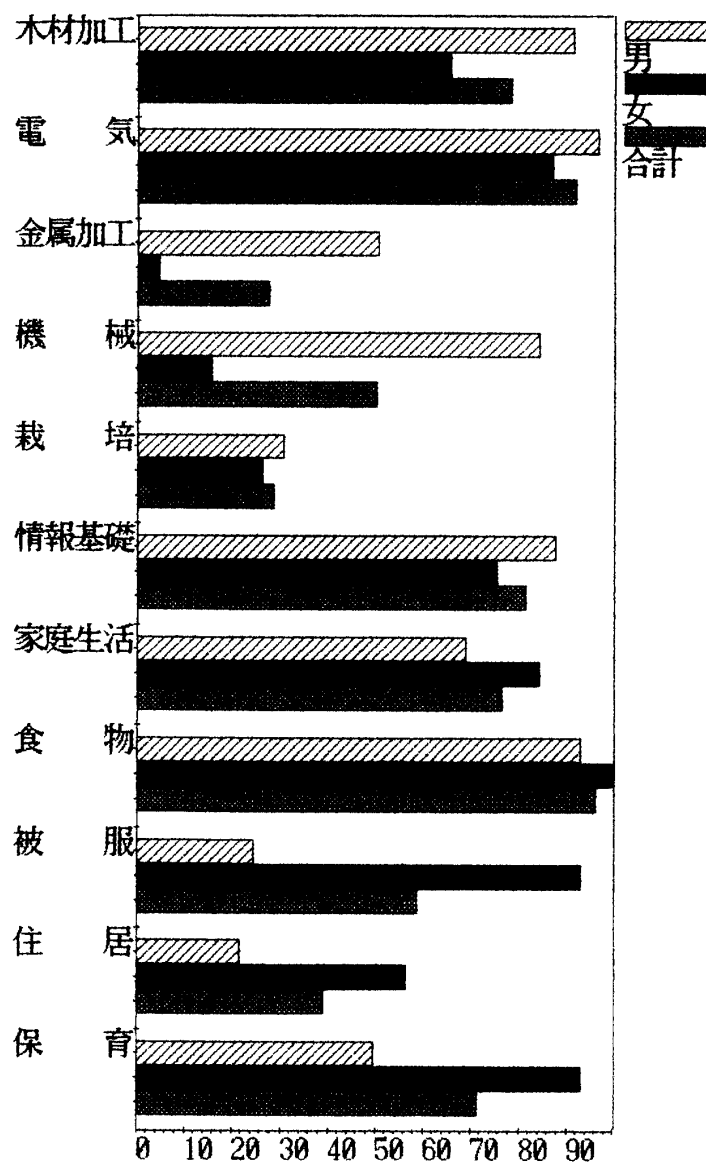


図3 男子・女子教員の合計7領域選択グラフ

い下位のものは、金属加工の4%をはじめ機械16%、栽培26%、住居56%の4領域であった。従って、系列別に見ると技術系列から3領域、家庭系列から4領域を選んでいることになる。

③ 男子・女子教師の総計が男・女生徒の合計に対して

11領域中7領域を選んでいるのは、食物の97%をはじめ電気の92%、情報基礎81%、木材加工79%、家庭生活77%、保育72%、被服59%の領域であった。反対に7領域に選んでいない下位のものは、金属加工の28%をはじめ栽培29%、住居39%、機械50%の4領域であった。従って、系列別に見ると技術系列から3領域、家庭系列から4領域を選んでいることになる。

以上、男子教師、女子教師及び男女教師の合計数における対生徒の7領域選択の特徴を%によって示してきた。以下、それらを総合しての考察を試み、一つの教科としての技術・家庭科の望ましい履修形態及び領域構造を追求してみたい。

2.4 調査結果の総合考察

必修教科の技術・家庭科は、性別によってその学習領域を分けるべきではない。若し性差があると言う理由でもって分ける部分を設定するのであれば、国語も数学も理科もまた音楽もそうしなければならない。中学校教育は義務教育であると言うことをわたしたちは忘れてはならない。

従って、他の教科と同じような立場に立ち、すべての男女生徒に、等しく、同質・同量の領域を与えなくてはならない。そのような立場に立てば、そもそも11領域の中から7領域の指導内容を選択すると言うこと事態、極めて変則的なことだとわたしには思われて仕方がない。

選択の領域を、学校、地域或いは個人によって認めることは、個性の多様化の面から、それはそれなりに長所が存在しよう。然し、そのことと必修と言う教科の性格の意味するものとを混同してはならない。選択教科群が設けられている以上、その目的・性格からして、基本的にはその中の技術・家庭科の教科で選択すべき領域を取り扱い考えるべきではなかろうか。

わたしたちがそのような立場をとるにしても、1993年度より新しい指導要領により学習を進めて行かなければならないことになっている。従って、以上に述べた本質的な技術・家庭科の性格をふまえて履修形態、履修領域を設定する必要がある。即ち、許される限りすべての生徒に対し、同時にして同一の領域を履修させるような研究を積み重ねなければならない。又、その方法は可能であると確信している。

この調査で見える限り、すべての教師が、すべての生徒に学ばせたい領域は、木材加工、電気、情報基礎、家庭生活、食物の5領域で技術系列が3領域、家庭系列が2領域であった。この選択領域を教える側即ち教師の面から見ると、この5領域は、男女生徒を対象に、同時に同一の領域を履修させてもよい立場で選択したものとして見てよい。

従って、この5領域を基本領域として、必修技術・家庭科の教育内容を構成すれば、時間数からみても難はないように思われる。然し、それぞれの教師が、男子生徒、女子生徒側に対して選択した領域への選択順位度の意調観は、この調査内容では明らかにはなっていない。又、この調査結果の数字からもわかるように、領域によっては生徒に対する選択観が、男子教師と女子教師との間に非常に大きな異なりを見せていることである。例えば、男子教師の場合、機械領域では男子生徒に対する選択意識・順位が95%、2位であるのに対し女子では16%、10位、逆に被服領域では男子でのそれぞれが29%、10位に対し女子では93%、2位のように。又、女子教師の場合、機械領域では男子生徒に対するそれぞれが76%、6位であるのに対し女子では15%、10位、逆に被服領域では男子でのそれぞれが20%、10位に対し女子では94%、3位のように。技術系列では機械領域と金属加工領域、家庭系列では被服領域と住居領域において特に教師側の男女差が著しい。

又、男子教師も女子教師も男子・女子両方の生徒に対し、同じように殆んど選択をせず、下位の方に位置付けしている領域は、技術系列の栽培、家庭系列の住居、次いで技術系列の金属加工の3領域であった。

以上のことから、教師の側から、履修形態をも考えに入れて7領域を選ぶとすれば、次のような領域選択と履修方法のタイプが考えられる。

Aタイプ：男女共学で5領域、男女別学で2領域ずつを履修する。男女共学では木材加工、電気、情報基礎、家庭生活、食物の5領域を、男女別学では男子は金属加工、機械の2領域を、女子は被服、保育の2領域で、男女生徒それぞれ7領域を履修する方法。

Bタイプ：男女共学ですべて7領域を履修する。この場合の7領域は、木材加工、電気、情報基礎、家庭生活、食物の5領域に、男女生徒共に特に選択度の低くない保育の領域と男女教師の男女生徒の合計に対する順位7位の被服領域を加えた領域で7領域を履修する方法。

Cタイプ：男女共学ですべて7領域を履修する。この場合の7領域は、木材加工、電気、情報基礎、家庭生活、食物、保育の6領域と女子生徒への最下位選択でない機械領域を加えた領域で7領域を履修する方法。

Aタイプをとれば、男子生徒は技術系列の木材加工、電気、情報基礎、機械、金属加工の5領域と家庭系列の家庭生活、食物の2領域との7領域を、女子生徒は技術系列の木材加工、電気、情報基礎の3領域と家庭系列の家庭生活、食物、被服、保育の4領域との7領域をそれぞれ履修することになる。Bタイプをとれば、男子・女子生徒共に、技術系列の木材加工、電気、情報基礎の3領域と家庭系列の家庭生活、食物、保育、被服の4領域との7領域を履修することになる。Cタイプをとれば、男子・女子共に技術系列の木材加工、電気、情報基礎、機械の4領域と家庭系列の家庭生活、食物、保育の3領域を履修することになる。

いずれのタイプをとるにしても、領域選択意識において、男子教師、女子教師の年齢層

の間には問題にする程の差は見られない。従って、教える側の教師の側のみから履修形態、領域選択を、学習指導要領をも加味して技術・家庭科のあるべき姿を求めながら考えれば、Bタイプ或いはCタイプに落ちつくのではないだろうか。

然し、履修対象が生徒である以上、教えられる側即ち生徒側の「学びたい領域」をも考えなければ、中身のある効果的なこの教科のカリキュラムの編成は困難である。拙稿“生徒・学生及び社会人の「技術・家庭科」の領域選択について”（岡山理科大学紀要27号B1991）で述べているように、教えられる側（生徒側）の選択した7領域は必ずしも教える側（教師側）と一致しているとは限らない。両者を重ねてみるとその一致点、不一致点が明らかとなる。即ち、両者が選択した7領域中で重なるのは、木材加工、電気、情報基礎、食物の4領域で、他の3領域は教師側は家庭生活、被服、保育の領域を、生徒側は機械、栽培、住居の3領域を選んでいる。この重ならない領域の追跡調査を行って、完全共学を目ざした確かな7領域を設定することが急務ではないかと思う。

4 おわりに

はじめのところで述べた教える側、教師の7領域選択意識調査研究の目的を十分に果たし得たとは言えないが、この調査結果から、教育の現場で直接生徒と接しておられる教師たちが取り上げている領域群とその履修方法の特徴、傾向性が、ある程度明らかになったのではないかと思う。

時間数が少なくなればなる程選ぶ領域数と教師の領域選択観が、この教科の盛衰に極めて大きい影響をもつ。完全な男女共学を目指せば目指す程その視点は大きい。

従って、この教師の領域選択意識と相まって、生徒側の望む領域群とを比較検討しながら、生徒たちに等しく与えられるこの教科の設定すべき領域を、新たな立場から将来に向かって打ち立てて行かなければならない。

この調査研究がその意味においていささかでも役立てば、と思う。諸先生方の御批判、御指導を仰ぎたい。

尚、この調査研究に御協力をいただいた岡山県公立中学校の技術・家庭科の先生方に心よりお礼申し上げます。

参考文献

- 1) 文部省「中学校学習指導要領」大蔵省印刷局1989
- 2) 文部省「中学校指導書 技術・家庭科編」開隆堂出版1989
- 3) 浅見 匡外「改訂中学校学習指導要領の展開 技術・家庭科編」明治図書1989
- 4) 教育小六法（平成3年度版）学陽書房1991
- 5) 梅田玉見「生徒、学生及び社会人の技術・家庭科の領域選択について」『岡山理科大学紀要』第27号B 1991
- 6) 平田晴路「高校技術科の新設に関する生徒の意識——技術・家庭科の必修領域を学習して——」『日本

産業技術教育学会誌』第30巻1号1998

- 7) 小川武範外「中学校技術・家庭科における技術関連領域の再編成と領域の創設」『日本産業技術教育学会誌』第34巻1号1992

Research on the Choice of Seven Domains of Industrial Arts and Homemaking by Junior High School Teachers

Tamami UMEDA*, Sadamitsu KAWASAKI** and Masayasu KINIWA***

**Faculty of Engineering,*

***Saidaiji Junior High School,*

****Attached Senior High School,*

Okayama University of Science

Ridai-cho 1-1, Okayama 700 Japan

(Received September 30, 1992)

In studying required industrial arts and homemaking, both men and women have to choose seven domains out of eleven and complete them. The purpose of this paper is to research into the choice of seven domain by public junior high school teachers of industrial arts and homemaking in Okayama Prefecture. According to the research, the following results are pointed out.

- 1) Five common domains which men and women teachers choose are woodworking, electricity, information basis, family life, and food and nutrition.
- 2) Six common domains which men and women teachers don't choose are metal-working, machinery, cultivation, clothing, housing, and childcare.
- 3) In the choice of two domains out of six, there is much difference not only between men and women teachers, but also between boys and girls students.

As a result, it was proved that there left room for a follow-up survey as to 2) and 3), and also that teachers should choose two definite domains for all students and organize seven desirable domains for coeducation.